

# 吉田寅松

よしだ とらまつ



吉田寅松

『京浜実業家名鑑』より

吉田寅松は天保8年(1837)横浜の名門吉田家の一族に生まれました。

明治3年(1870)吉田家は、先祖由来の地である横浜の吉田新田の広大な沼地を埋立てることになり、江戸で官軍の用達をしていた一族の寅松を呼び寄せ、この埋立工事を委任しました。この工事が契機となり、寅松は明治12年(1879)吉田組を興して請負業に進出し、鉄道工事や軍港工事で活躍しました。

## 失脚から再起を果たし、横浜の名士となる

吉田は吉田新田の埋立工事を完成させ、40歳を過ぎてから吉田組を興し、請負業者として成功を納めました。しかしそのスタートは順風満帆ではありませんでした。開業して間もなく、長浜一敦賀間の鉄道工事を請負いますが、竣工期日を間違えたことで鉄道局の井上勝の怒りを買って、工事停止になりました。井上は「鉄道の父」とよばれ鉄道建設を牽引する人物でした。吉田はこのため財産を失い、所有の土地も手放して病にも苦しめられました。しかし、その後も負債を整理しながら吉田組を継続し、舞鶴の軍港工事以後は海軍に引き立てられ、軍港建設に附帯する工事を請負って再起を果たしました。

明治30年(1897)吉田の還暦の祝いの宴席には紳士淑女数千人が集まり、宴は三日間に渡ったといわれます。吉田は金銭には淡泊で公共心に富み、紳士的な名士として人望を集めました。また夫人の芳子は洋装し、二頭立ての馬車を乗り回して政府高官の邸に出入りしたり、吉田組の危機の際には現場を草鞋を履いて見廻るなど女丈夫(じょじょうふ)だったといわれます。

# 吉田寅松の仕事

## 【明治7年 竣工】吉田新田沼地埋立（神奈川県）



『吉田新田古図文書』より

「蓬萊町外七ヶ町埋立及び根岸掘割図」

明治3年(1870)に着工。運河(堀割川)を造りながら、その土で吉田新田にある約七万坪の沼地(南一ツ目沼)を埋立てました。吉田は開発者として工事を督励し、資金調達などに奔走しました。この大工事が、後に吉田が請負人となる契機となりました。

埋立地は蓬萊町・万代町・不老町・翁町・扇町・寿町・松影町という七つの町名が付けられました。根岸湾(左図の左上)につながる堀割川は、横浜の舟運に重要な役割を果たしました。

## 【明治33年 竣工】舞鶴軍港用地開削（京都府）



舞鶴鎮守府(明治44年頃)

『新舞鶴案内』より

舞鶴の軍港用地は丘陵があり幅員が広くて堀削工事が困難で、さらに土捨て場も遠く、請負価格が非常に安かったので引き受けるものが誰もいませんでした。吉田はこの工事を請負い、舞鶴に移住、新式の機器も導入し予定期間内に工事を完成させました。舞鶴軍港には鎮守府が置かれ、日本海側の防衛と商業の拠点となりました。

### 【吉田寅松】参考文献

鉄道建設業協会・編 『日本鉄道請負業明治篇』(鉄道建設業協会)

菅野忠五郎・編 『鹿島組史料』(鹿島建設)

菊岡俱也 『史録 建設業の歴史』

中区制五〇周年記念事業実行委員会・編 『横浜中区史』(中区制五〇周年記念事業実行委員会)